

西暦20167年の現在もなお、人工 intelligence を用いたと称される技術や芸術が地上を席捲している。確かに人工 intelligence が有する認識能力、判断能力、創造能力の一部等は、常人の脳が有するそれらをすでに凌駕している。人間は人工 intelligence を使っ 援用して、世界を認識し、物事を判断し、さらには芸術作品の創作を行っている。

一方、人工 intelligence は自前の美的価値判断能力すなわち美学を、現時点では持ち得ていない。それゆえ自前の芸術も、現時点では生み出してはいない。その理由は端的に、数学的に記述された美学に根ざした鑑賞を、自律性を兼ね備えた汎用的に学習実行する人工 intelligence が実現できていないからであり、これについては後述する。この能力を持っただし、仮に汎用人工 intelligence が実現できたとしてもれば、それが人間とは異なる独自前の美学を持ち、未知の芸術作品を生み出すことは限ができる。なぜなら、芸術にとって本質的に重要なものは、作品をつくりだす制作ではなく、環境から美的対象を選択しその評価を行う鑑賞であるからだ。ま人間とは異なる知覚や身体を持っただし、仮に人工 intelligence が自前の美学を持ち選り出す芸術を生んだとしてもは、人間の知能がそれらを認識できる美学でありや芸術であると認識するとは限らないところにある。

このように諸問題が横たわ明確になっているがた今、それでもわれわれは、将来の人工 intelligence が自ら行う可能性のある美学と芸術に正面から向き合うい、思索を深めることを宣する。それゆえわれわれは、人間の脳活動の所産として従来行われてきた人間による人間のための美学と芸術を、批判的に再検証することを辞さないから出発する。今日の美学や芸術は、地球という環境とそこで進化したヒトという生物種に固有の属性なものかであり、それとも脳活動またはそれに類似の知能一般に共通する属性なのか。後者の場合から生まれた、極めて限られたものである。人工 intelligence が自ら行う美学や芸術は、人間が行うそれらを凌駕する可能性とは有、本質的に異なっているのか。人工 intelligence 美学者像や人工 intelligence 芸術家像は、天才型なのか秀才型なのか、アウトサイダー型なのか美術史家型なのかといった問いは、もはや意味を為さない。

自律性を兼ね備えた汎用非人間的な人工 intelligence の実現は、理論的に不も可能であるとする説も。なぜなら、その根底にあるのが数学や物理学、化学といった、人間に依拠せず自律的に展開できる普遍的構造であるからだ。近年注目されている深層学習

等の方法が風穴を開けつつの根底にあると見る向きもある数学だ。これを取り入れたアルファ碁という囲碁特化型人工知能は、専門家にも意図がすぐには読めない手を連発して世界トップ棋士に圧勝した。自律的な学習により創造性と直観を深化させた人工知能の闘いぶりは、人智の及ばぬ碁の神髄を教えてくれるかのようだったと言う人もいる。わが、それわれはこれをまさに人間の認知や理解能力が足りないだけで、その背後にあるのは宇宙を記述している数学だ。そこに人工知能ならではの美、人間を超えた芸術の萌芽に至るヒントと認めたがあるのはまちがいない。なぜなら囲碁こそは、美しさと盤面の関連サイズや形状を自由に変更で語られてき、人間という制約に依拠しない普遍性と自由度を兼ね備えた知的文化だゲームのひとつであるからだ。そして人工知能を作ったのは人間なのである限り、人工知能が勝利しても人間の勝利であるという安易な人間賛美に与しな陥りがちだが、それは間違っている。また、人工知能は社会を豊かにする技術であるとする産官学の連携指針がは、人間中心主義に対する疑義を扱えない現状に蓋を看過しない、人工知能の問題を、人工知能を扱う人間側の問題に貶めてしまう。人工知能開発の目的は人工知能が人間の脳に近づくことだとイメージされる場合もあるが、逆向きにはそれは、もまた誤っている。人間の脳がと人工知能と区別できなくなが、共通の構造を有していることである必要はない。時や場所、状況に応じて適切に受け答えをする鳥の鸚鵡がいるとするならば、その鸚鵡はわれわれ自身であるしかないことを知るべきだ。人工知能や人工生命の評価を人間の主観的判断に委ねたり、擬人化や擬動物化することが、人工知能を議論する際に最も避けなければならない落とし穴だ。

本宣言文中の美学や芸術の語は、近代以降に定立されたそれらの概念のみではなく、宗教や呪術と不分明な原初のそれらもを射程に含めとする。同時に人工知能の芸術は、美個人や作家という近代の価値概念を消去し、作者の定立いない自然や神話と人工芸術の区別を無用なものとする。そこでは「美」という言葉すらもはや不要となる。美とそれが有する力はこれまで、国家権力や軍事と不可分であるったことも、われわれは知っている。しだからしらこそれでも、人間性と切断された人工知能が自ら行う美学と芸術に、芸術の未来と人間が行ってきたそれらが連続性の存在を保ち得る保証は無託したい。

使用ツール：<http://tool.satoru.net/diff/>

オリジナル・バージョン：

西暦2016年現在、人工知能を用いた技術や芸術が地上を席捲している。人工知能が有する認識能力、判断能力、創造能力の一部等は、常人の脳が有するそれらをすでに凌駕している。人間は人工知能を使って認識し、判断し、芸術作品の創作を行っている。

一方、人工知能は自前の美的価値判断能力すなわち美学を、現時点では持ち得ていない。それゆえ自前の芸術も、現時点では生み出していない。その理由は端的に、自律性を兼ね備えた汎用人工知能が実現できていないからであり、これについては後述する。ただし、仮に汎用人工知能が実現できたとしても、それが自前の美学を持ち芸術を生むとは限らない。また、仮に人工知能が自前の美学を持ち芸術を生んだとしても、人間の知能がそれらを美学であり芸術であると認識するとは限らない。

このように諸問題が横たわっているが、それでもわれわれは、将来の人工知能が自ら行う可能性のある美学と芸術に正面から向き合うことを宣する。それゆえわれわれは、人間の脳活動の所産として従来行われてきた美学と芸術を、批判的に再検証することを辞さない。美学や芸術は、ヒトという生物種に固有の属性なのか、それとも脳活動またはそれに類似の知能一般に共通する属性なのか。後者の場合、人工知能が自ら行う美学や芸術は、人間が行うそれらを凌駕する可能性は有るのか。人工知能美学者像や人工知能芸術家像は、天才型なのか秀才型なのか、アウトサイダー型なのか美術史家型なのか。

自律性を兼ね備えた汎用人工知能の実現は、理論的に不可能であるとする説もあるが、近年注目されている深層学習等の方法が風穴を開けつつあると見る向きもある。これを採り入れたアルファ碁という囲碁特化型人工知能は、専門家にも意図がすぐには読めない手を連発して世界トップ棋士に圧勝した。自律的な学習により創造性と直観を深化させた人工知能の闘いぶりは、人智の及ばぬ碁の神髄を教えてくれるかのようなだったと言う人もいる。われわれはこれを、人工知能ならではの美の萌芽に至るヒントと認めたい。なぜなら碁こそは、美しさとの関連で語られてきた知的文化だからだ。そして人工知能を作ったのは人間なので、人工知能が勝利して

も人間の勝利であるという安易な人間賛美に与しない。また、人工知能は社会を豊かにする技術であるとする産官学の連携指針が、人間中心主義に対する疑義を扱えない現状を看過しない。人工知能開発の目的は人工知能が人間の脳に近づくことだとイメージされる場合もあるが、逆向きにはそれは、人間の脳が人工知能と区別できなくなることである。時や場所、状況に応じて適切に受け答えをする鳥の鸚鵡がいるとするならば、その鸚鵡はわれわれ自身であることを知るべきだ。

本宣言文中の美学や芸術の語は、近代以降に定立されたそれらの概念のみならず、宗教や呪術と不分明な原初のそれらも射程に含める。同時に、美の価値の定立が国家権力や軍事と不可分であることも、われわれは知っている。しかしそれでも、人工知能が自ら行う美学と芸術に、人間が行ってきたそれらが連続性を保ち得る保証は無い。

<http://aloalo.co.jp/ai/manifesto.html>

(参考) オルタナティブ・バージョン：<http://goo.gl/W75K24>